

深 町 遺 跡

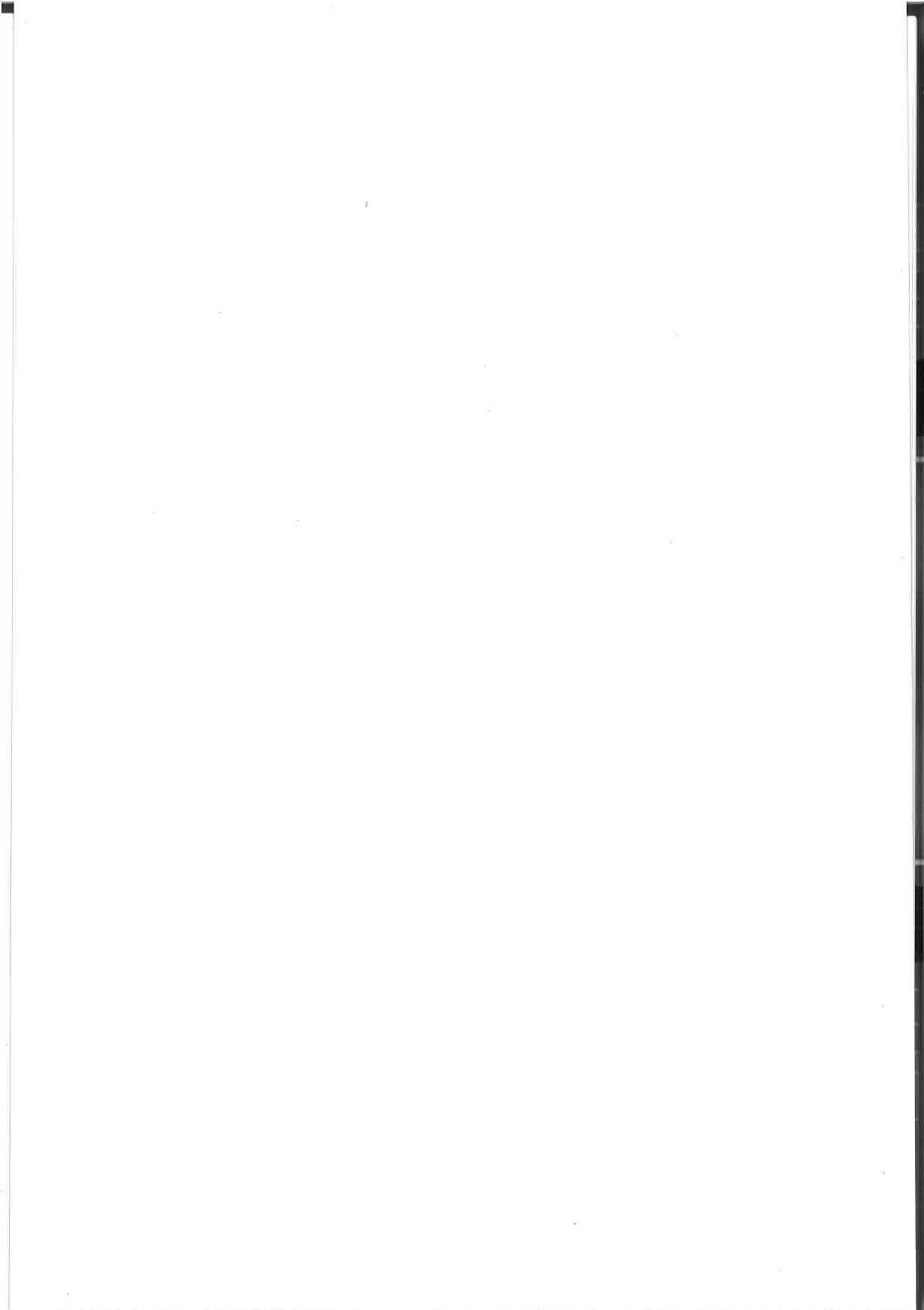
福岡県糸島郡二丈町大字福井所在遺跡の調査報告

二丈町文化財調査報告書

第 39 集

2008

二丈町教育委員会





遺跡遠景

序

本書は二丈町西部の海岸線に沿って形成されている砂丘上で確認された集落遺跡の調査記録であります。

同地は昭和25年に弥生時代後期の甕棺墓が発見された福井フユキリ遺跡の隣接地にあたり、弥生時代の遺構が広がることが想定される地域でもあります。

今後、本遺跡の調査成果が糸島のみならず、我が国考古学研究の一助となれば幸甚であります。

平成20年 3 月31日

二丈町教育委員会

教育長 藤 田 孝 治

例 言

1. 本書は、個人農地の区画整理に伴って実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 調査は、国県補助を受けて二丈町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査の期間は、平成9年4月7日から平成9年4月30日までである。
4. 本書に掲載した遺構図の実測は、古川が行った。
5. 遺構の写真撮影は、古川が行い、空中写真撮影については、(有)空中写真企画に委託した。
6. 本書に掲載した遺物の実測ならびに遺物写真の撮影は古川が行った。
7. 資料の収集にあたって、福岡県立糸島高等学校 晃 治校長、永岡信泰総括教頭、岡田健一社会科教諭、伊都国歴史博物館 岡部裕俊氏の御協力を得た。
8. 本書の執筆ならびに編集は、古川が行った。

本 文 目 次

	頁
I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 位置と環境	
1. 位置と環境	3
2. 福井冬切（フユキリ）、番所出土の後期甕棺について	4
3. 参考資料	10
III. 調査の記録	
1. 調査の概要	15
2. 検出遺構	15
3. 出土遺物	19
IV. 調査のまとめ	24

図 版 目 次

	頁
第1図 遺跡位置図 (S = 1/50,000)	2
第2図 福井地区甕棺墓出土地 (S = 1/5,000)	4
第3図 冬切遺跡甕棺墓出土状況 (S = 1/20)	5
第4図 冬切遺跡1号・2号甕棺 (糸島高校蔵) 実測図 (S = 1/8)	5
第5図 番所遺跡B棺墓出土状況 (S = 1/10)	7
第6図 番所遺跡出土甕棺 (糸島高校蔵) 実測図 (S = 1/8)	9
第7図 吉井浜遺跡・長石遺跡出土甕棺 (糸島高校蔵) 実測図 (S = 1/8)	11
第8図 深町遺跡周辺地形図	12
第9図 遺構配置図 (S = 1/300)	折込み
第10図 1号土壙実測図 (S = 1/30)	15
第11図 2号～5号土壙実測図 (S = 1/30)	16
第12図 6号土壙実測図 (S = 1/30)	17
第13図 7号土壙実測図 (S = 1/30)	17
第14図 1号・2号溝状遺構実測図 (S = 1/120)	18
第15図 3号・4号溝状遺構実測図 (S = 1/120)	19
第16図 1号土壙出土遺物実測図 (S = 1/3)	20
第17図 1号・2号土壙出土遺物実測図 (S = 1/3)	21
第18図 1号・2号溝状遺構出土土器実測図 (S = 1/3)	22
第19図 遺構検出面出土遺物実測図 (S = 1/3)	23

写真図版

巻頭カラー 遺跡遠景

写真図版－1 (上) 遺跡全景 (真上より)

(下) 遺跡全景 (南側より)

写真図版－2 (上) 東側遺構検出状況

(下) 西側遺構検出状況

写真図版－3 (上) 1号土壇 (北側より)

(下) 1号土壇 (東側より)

写真図版－4 (上) 1号・2号溝状遺構全景 (真上より)

(下) 1号・2号溝状遺構全景 (西側より)

写真図版－5 (上) 4号溝状遺構近景

(下) 4号溝状遺構遺物出土状況

写真図版－6 出土遺物1

写真図版－7 出土遺物2

写真図版－8 冬切遺跡出土甕棺

写真図版－9 番所遺跡出土甕棺1

写真図版－10 番所遺跡出土甕棺2

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成8年度より開始された二丈町福井地区の県営ほ場整備事業では、同年度より試掘調査を継続して実施してきており、平野中央部の独立低丘陵を中心に遺構（ヲシマ遺跡）が確認され、本発掘調査を開始していた。今回の調査地点については当初、県営事業地内であったため、試掘調査を平成8年度末に実施する予定であったが、地権者の牧草地としたいという意向により事業地より外れ、個人の農用地となっていた。その後、牧草地として1枚の区画整理を早急にしたいとの意向が伝えられ、町教委では試掘確認調査の必要性を地権者に説明、文化財保護の重要性をご理解して頂いた上で平成9年度4月に試掘調査に入った次第である。

試掘では北（海）側より緩斜面となる砂丘を確認、表土以下直ぐにピット群、溝状遺構を検出している。このため、遺跡保存の必要性を地権者に説明したが、結果的には記録保存として本調査へ移行する事で同意を得たため、個人農地の区画整理事業として捉えて国県補助事業として発掘調査を実施する運びとなった。

2. 調査の組織

発掘調査ならびに報告書作成に従事した組織は、以下に記すとおりである。

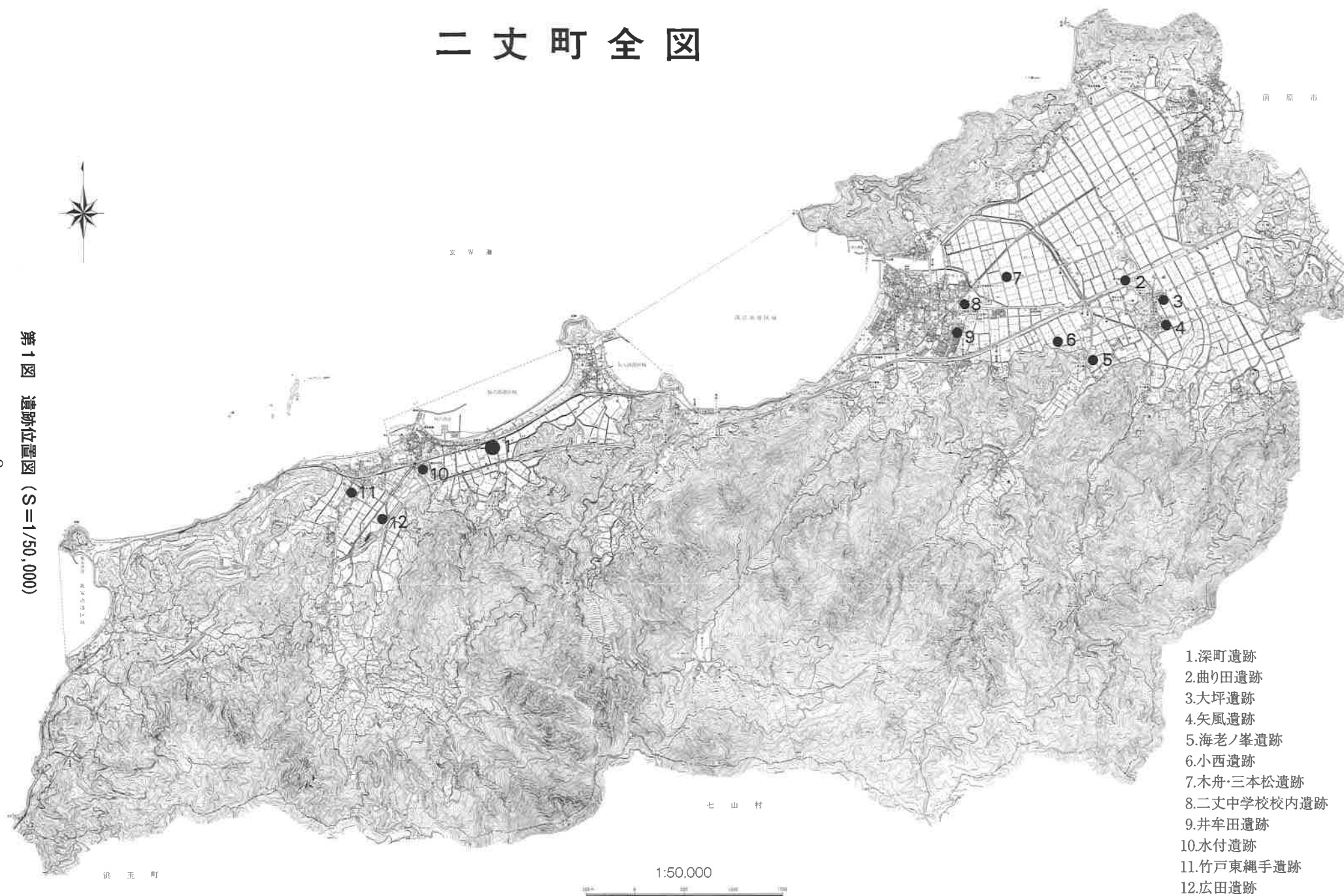
発掘調査（平成9年度）

調査主体	二丈町教育委員会		
総 括	教 育 長	小 川 勇 吉	
	教 育 課 長	空 閑 俊 明	
庶 務	教育課課長補佐	清 水 泰 次	
	社会教育係長	大 庭 一 成	
調 査	社会教育係主任主事	古 川 秀 幸	
	同 主 事	津 國 豊	

報告書刊行（平成19年度）

調査主体	二丈町教育委員会		
総 括	教 育 長	藤 田 孝 治	
	教 育 課 長	松 崎 治 幸	
庶 務	課 長 補 佐	松 藤 公 元	
	文 化 係 長	古 川 秀 幸（兼：調査担当）	
調 査	嘱 託	菅 さとみ	

二丈町全図



1. 深町遺跡
2. 曲り田遺跡
3. 大坪遺跡
4. 矢風遺跡
5. 海老ノ峯遺跡
6. 小西遺跡
7. 木舟・三本松遺跡
8. 二丈中学校校内遺跡
9. 井牟田遺跡
10. 水付遺跡
11. 竹戸東縄手遺跡
12. 広田遺跡

第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)

Ⅱ．位置と環境

1．位置と環境

二丈町は東西13km、南北8kmと東西に長い地形を呈し、町面積は57.07km²を測る。北側は玄界灘に面し、南側からは脊振山系の山々が迫るため、町土の内、平野が占める割合は30%と狭いものとなる。また、17kmと長い海岸線に沿って砂丘が形成されており、生産地としての平地はさらに狭いものとなる。

本書報告の深町遺跡が所在する福井地区については町の西部域にあたる。同地には吉井地区の東山東方を水源とする福井川が流れているが、同河川は海岸線近くで福吉川に合流、また、上流域で分岐した流路が本遺跡西側において海岸線に形成された砂丘にまで到達し、そこから東北東に流露を変えて大入地区で海へと流入している。この流域に広がるのが「福井平地」と呼ばれる小平野であるが、大部分は海拔20m以下の低地となり、遺跡の立地が認められない。しかしながら、平地中央部に独立低丘陵（通称ヲシマ）が形成されており、この部分には弥生時代～戦国時代にわたる遺跡（ヲシマ遺跡）が確認されている。

当地域における遺跡の分布については海岸線に沿って1.5kmの長さで形成されている砂丘とその縁辺部に集中することとなる。これまでは本書報告の深町遺跡をはじめ、弥生後期の甕棺墓が調査された番所遺跡、大入地区の才良木遺跡など調査されているが、偶発的に発見され、個人が所有している弥生土器などもある。

福井地区で見られる遺跡の立地状況は、同地のさらに西側にあたる吉井地区においても認められる。吉井地区の砂丘近辺では、これまで本格的な発掘調査は行われていないが、大正の初め頃、甕棺墓（西古川遺跡）が発見され、銅剣（現東京国立博物館蔵）、銅矛（現太宰府天満宮蔵）が出土していることが知られている。現在、同遺跡の位置は、福岡県教育委員会発行の『遺跡分布地図』上では、JR福吉駅南側の水田部となっているが、近年の試掘調査で同地は低湿地帯であることが判明しており、『二丈町字切図』の「西古川」の範囲と対照すると、駅北側の砂丘縁辺部にあたる可能性も高い。また、棺自体も所在不明のままであり、明確な時期は確定できないものであるが、銅剣の形式からみて弥生時代前期末に比定でき、同時期における首長層の墳墓として注目される遺跡である。この他、砂丘に沿った松原地区からも数基の成人甕が発見されているが、遺構の出土状況は不明であり、町内の公民館に保管されていた甕棺片を見てみると弥生中期前半代のものであった。

本書報告の深町遺跡については、福井地区の海岸砂丘南側斜面に立地する。同地区の名は、原田大六氏が命名した糸島地域での後期甕棺の指標形式となる「福井式甕棺」の出土地として知られている地域である。後期甕棺の地方色として位置づけられる同甕棺は、基本的に後期前半より衰退する北部九州の甕棺墓葬の中で古墳時代前期まで続く形式であり、日常大型土器の転用棺ではなく明らかに棺専用としての作られているものと考えられる。「神在式」、「福井式」と続くこの形式は、全体的に丸みをおびた胴部に「く」字状に開く口縁を有するもので、器高に比べて底部が極端に小さく、頸部や胴部に巡らされる凸帯に特徴が認められる。この時期は北部九州全域では殆ど甕棺葬が行われていない時期となるが、糸島地域以外、佐賀平野や壱岐においても散見されており、糸島地区の出土例の多さは明らかに独自性が強いことを示すもので、他地域へ波及していったものと考え

られよう。

次項で、「福井式甕棺」を中心に福井地区での後期甕棺の調査例を紹介していきたい。

2. 福井冬切（フユキリ）、番所出土の後期甕棺について

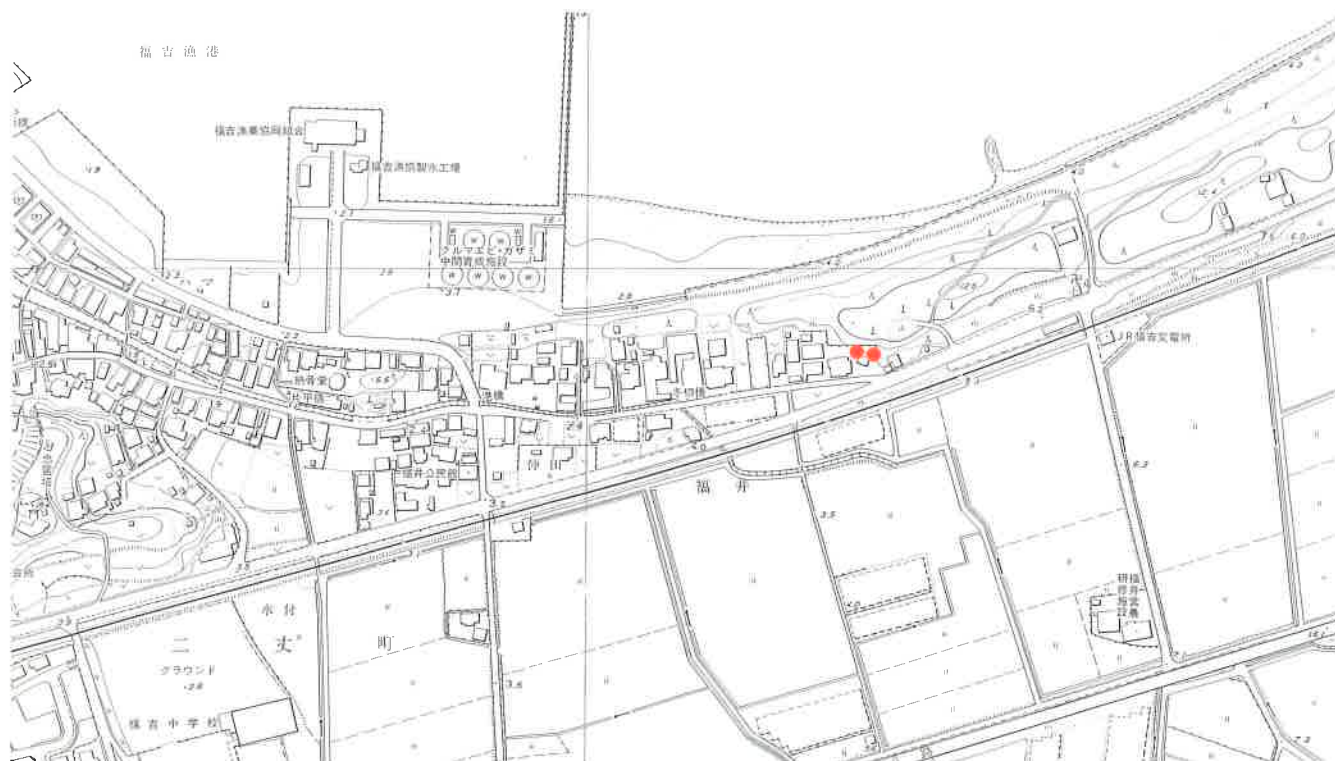
深町遺跡の北側に広がる砂丘内（松原内）において甕棺墓が調査されている。「福井フユキリ遺跡」、「番所遺跡」として周知化されたこの遺跡は、昭和25年～昭和41年にかけて糸島高校歴史部によって調査されたもので、調査の概要は同校の論文雑誌『糸高文林』に掲載されている。また、出土棺の研究についても調査を指揮した大神邦博教諭が『古代学研究』第53号に「福岡県糸島地方の弥生後期甕棺」として発表されて後期甕棺の形式研究の基礎を作られ、後期棺の地方色を提示された。ここでは、同遺跡の重要性の再確認と深町遺跡との関連性を踏まえ、両遺跡を紹介しておきたい。

福井 冬切遺跡

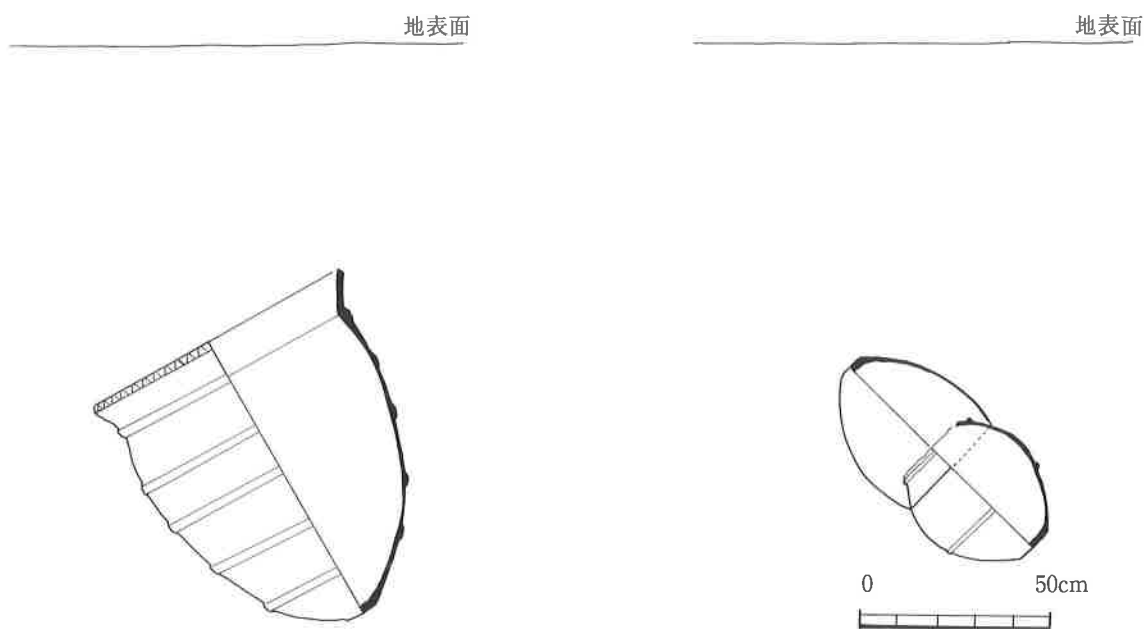
所在地 福岡県糸島郡二丈町大字福井字冬切

昭和26年から27年にかけて糸島高校歴史部によって発掘調査がなされたものである。

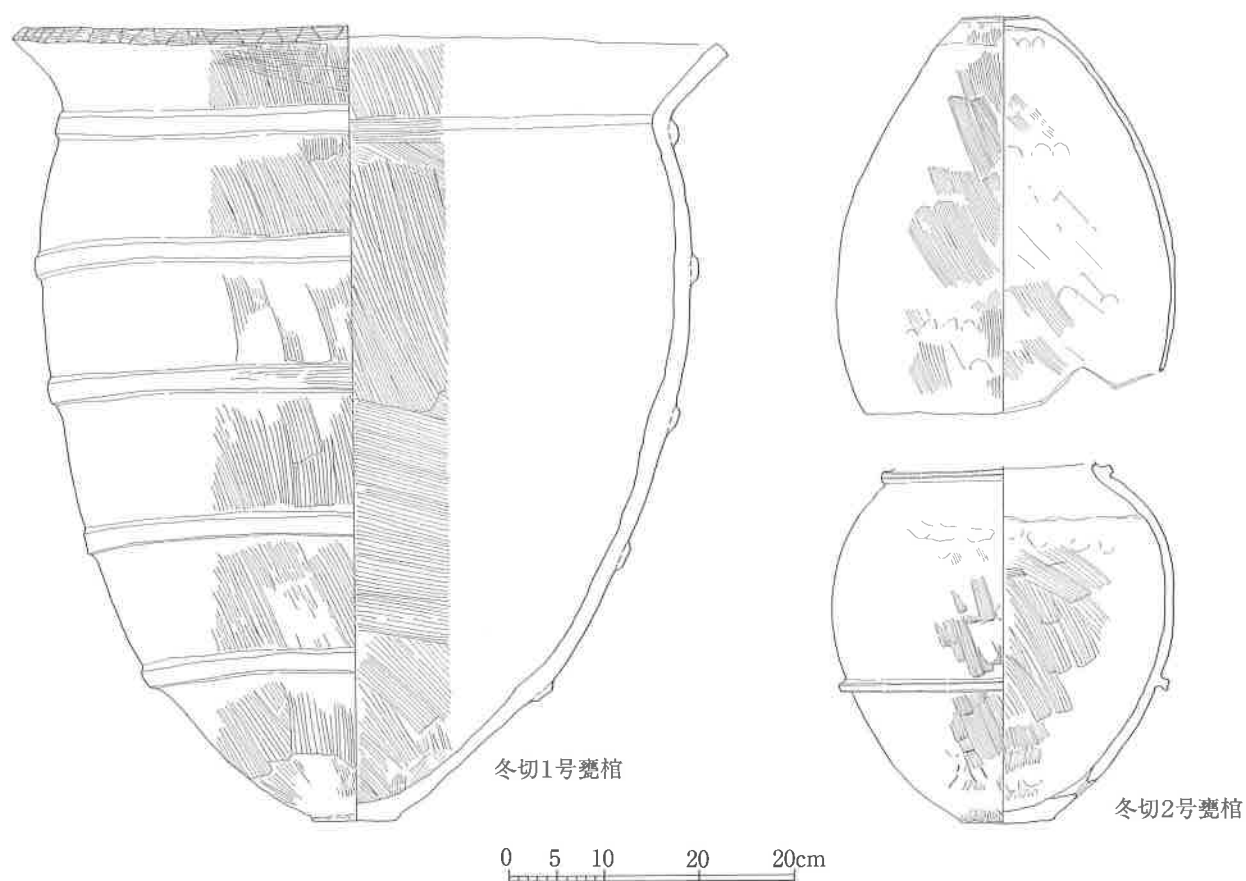
本書報告の深町遺跡と国道、JRを挟んで対峙する砂丘上で確認されたもので、共に調査の概要が『糸校文林』に掲載されているため、ここではその要約を紹介したい。



第2図 福井地区甕棺墓出土地（S=1/5,000）



第3図 冬切遺跡甕棺墓出土状況 (S=1/20)



第4図 冬切遺跡1号・2号甕棺 (糸島高校蔵) 実測図 (S=1/8)

昭和25年、個人住宅裏の砂丘段丘崩壊面で縄文土器と弥生土器片が発見された。その通報を受けた糸島高校歴史部によって、翌25年6月に2基（第1号棺：弥生後期後半、第2号棺：前期の小児棺と報告）の甕棺墓が確認され、昭和26年3月に1号棺の発掘調査（第1次調査）が行われている。その後、昭和27年7月に2号棺（合わせ口甕棺）の発掘が行われている。

出土した甕棺の内、1号棺は糸島地方にみられる弥生後期後半～終末期にかけてのものである。また、2号棺は弥生前期とされているが、後期中頃に比定される日常土器転用棺と考えられる。

報告された埋葬状態図をみると、1号棺は調査時には露出していたものであろうが、近辺の状況より地表より150cmの深さに埋葬されたものと想定されている。また、掘り方などは検出されていないが、埋葬角度が58°と直立に近いことが認められる。2号棺についても同様であるが、埋葬角度が41°と強く、上下棺とも頸部以上を打ち欠いた転用棺の特徴が認められる。

昭和26年の調査

1号棺（第4図）

前記の「福岡県糸島地方の弥生後期甕棺」掲載の甕棺番号（以下、大神番号）5にあたるもので、所謂、「福井式甕棺」と呼称されるものである。器形は卵型を呈し、頸部に1条、胴部に4条の扁平突帯が添付される。口縁部の開きが強く、胴部最大径よりも大きい。また、底部は平底を呈するが、平底の感は薄れてはきている。内外面、粗いハケ調整を全面に施し、口縁端部にはヘラ状工具により「ハ」字状の刻み目が連続して施入される。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好となる。器高83.7cm、口縁部径73.2cm、底部径9.0cmを測る。

弥生終末期の甕棺にみられる特徴であるが、タガ状の突帯数が5条と多い。また、同棺としては、突帯形態が幅広とはならず、また、胴下半へのタタキ調整が認められない点から終末期まで下らず、後期後半代に収まるものであろう。

昭和27年の調査

昭和25年に発見されていたもので、昨年度の1号甕棺墓に続いて発掘がなされている。

発見時より弥生前期の小児棺と報告されていたものであるが、形態的にみて後期前半代に比定できるものである。

2号棺（第4図）

上甕

甕形土器と考えられ、肩部以上を打ち欠いている。胴部は長胴形を呈し、底部は平底の感が薄れ、レンズ状となる。調整は内外面、ハケ調整を施し、色調は淡黄褐色。焼成は良好となる。打ち欠きまでの器高は42.0cm、底部径8.6cmを測る。

下甕（第4図）

下甕は甕形土器となり、頸部以上打ち欠く。胴部は丸みを帯び、底部はレンズ状となる。胴部中位下と頸部に「コ」字状突帯を巡らす。また、底部に穿孔が認められる。内外面ハケ調整を施し、色調は明茶褐色、焼成は良好となる。打ち欠きまでの器高は38.0cm、底部径9.8cmを測る。

福井 番所遺跡

所在地 福岡県糸島郡二丈町大字福井字番所

昭和37年に個人の通報により確認された遺跡で、同年から41年にかけて糸島高校歴史部によって調査がなされたものである。

遺跡は国道202号線の北側に広がる砂丘上に立地しており、後期の甕棺墓を主体とした墓群が確認されている。以下、調査年度を追って紹介したい。

昭和37年の調査

民家の裏で砂取作業中に発見されたもので、報告を受けた歴史部によって調査がなされた。

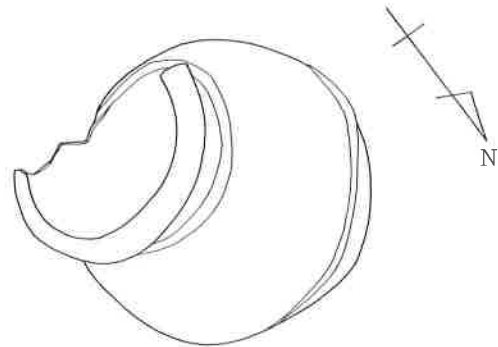
立地は玄界灘に面した砂丘の南側斜面にあたり、海拔10mを測る。複合口縁壺を転用棺と土器片が確認されていたが、発掘調査は行われていない。

昭和38年の調査

『いと・しま』NO-4（S39刊行）に「すでに出土していたカメ棺」として、実測図が紹介されている。調査の概要や出土状況は不明であるが、糸島高校に保管されている同棺には「昭和38年」の注記がされているが、

昭和38年出土甕棺（第6図）

頸部中位以上を打ち欠いたもので、広口壺と考えられる。頸部からの立ち上がりが直線的となり、頸部と胴部中位に扁平の凸帯が付く。外面ハケ調整を施し、色調は赤褐色を呈す。現存高45.0cm、底部径8.2cmを測る。



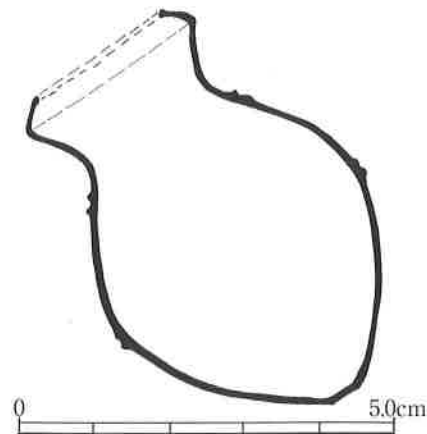
昭和39年の調査

昭和37年度に確認されていた個人地内の甕棺墓の調査が昭和39年5月に実施されている。

調査では2基の甕棺が発掘されており、『糸高文林』13にその概要が報告されている。

A棺墓

報告文によると、A棺とされた甕棺は複合口縁の壺形土器を転用した単棺と考えられるもので、砂丘南側緩斜面で検出されている。文化財保護行政の黎明期であり、当時の調査方法で掘り方などは意識されておらず、墓壙などは不明である。図面上では主軸を南側にとり、埋葬角度は55度を測る。



第5図 番所遺跡B棺墓出土状況（S=1/10）

A棺（第6図）

棺は複合口縁の壺形土器であり、頸部と胴部中位に二重の三角突帯が付される。また、底部に2.0cmの穿孔が認められる。器面調整では全体に薄いハケ調整が施され、赤色顔料（朱）の塗布が認められる。器高55.0cm、口縁部径33.0cm、底部10.0cmを測る。

B棺墓（第5図）

B棺とされたものは、A棺より3mほど離れた地点で検出されたもので、完全に破壊されていたために埋葬状況は不明であったとされる。鉢形土器の転用棺とされているが、甕棺墓となるかは判断できない。ここでは報告文のまま、B棺として紹介したい。

B棺（第6図）

棺は鉢形土器であり、頸部に一重の三角突帯が付される。内外面粗いハケ調整が施され、色調は暗褐色を呈す。器高26.0cm、口縁部径32.0cm、底部8.0cmを測る。

昭和40年の調査

調査の詳細は不明であるが、後期の合わせ口甕棺墓が発掘されている。現在、糸島高校郷土資料館に保管されている甕棺と考えられるもので、【大神番号】7としたものである。

1号棺上甕（第6図）

大神番号7の上部にあたるものである。胴部は卵形を呈し、頸部より外上方へ開いて大きめの口縁部へといたる。また、口唇部にはヘラ工具による連続の「ハ」字状の刻みを施入する。底部は器高に比べて小さく、その形状は平底となる。凸帯は幅広の扁平凸帯であり、頸部に1条、胴部に3条を巡らす。調整は内外面とも全面に粗いハケ調整が施され、色調は暗茶褐色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好となる。器高85.5cm、口縁部径69.3cm、底部径7.4cmを測る。

1号棺下甕（第6図）

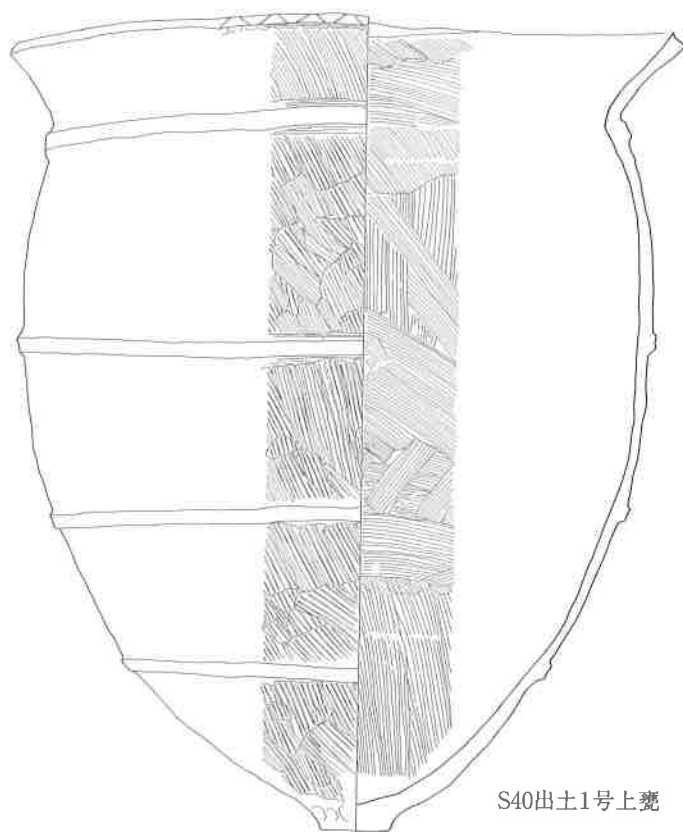
大神番号7の下部にあたるものである。器形は上甕に近いが、胴部の凸帯が4条と多い。また、各突帯には板状工具によるナデ調整が施されており、ハケ目が顕著に残る。下甕は頸部から上を打ち欠いているが、これは同形の甕による合わせ口式甕棺としたためであろう。調整は内外面とも全面に粗いハケ調整が施され、色調は暗茶褐色、胎土には砂粒を含み、焼成は良好となる。頸部までの器高は83.1cm、底部径7.8cmを測る。

昭和41年の調査

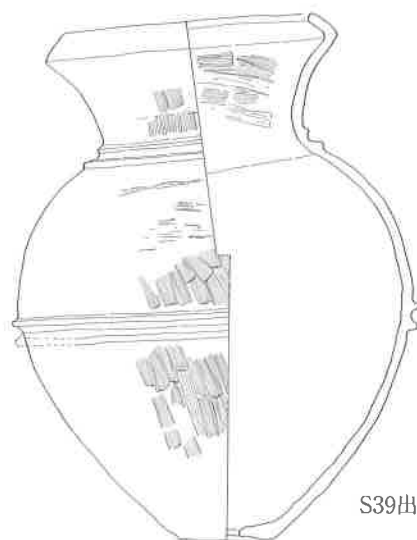
昭和39年度調査地点から3m程離れた地点において甕棺墓1基が確認され、発掘調査が行われている。

甕棺（第6図）

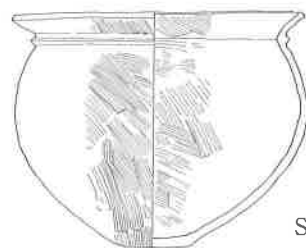
口縁部の一部が打ち欠かれているが、広口壺となる。頸部以上は直線的に伸びて、刻目を施す口縁部へといたる。凸帯は頸部と胴部最大径下方の2ヶ所に巡らし、その形状もシャープさを欠く、扁平凸帯となる。また、底部は平底とならず、レンズ底となる。外面調整は細かいハケ調整が施される。



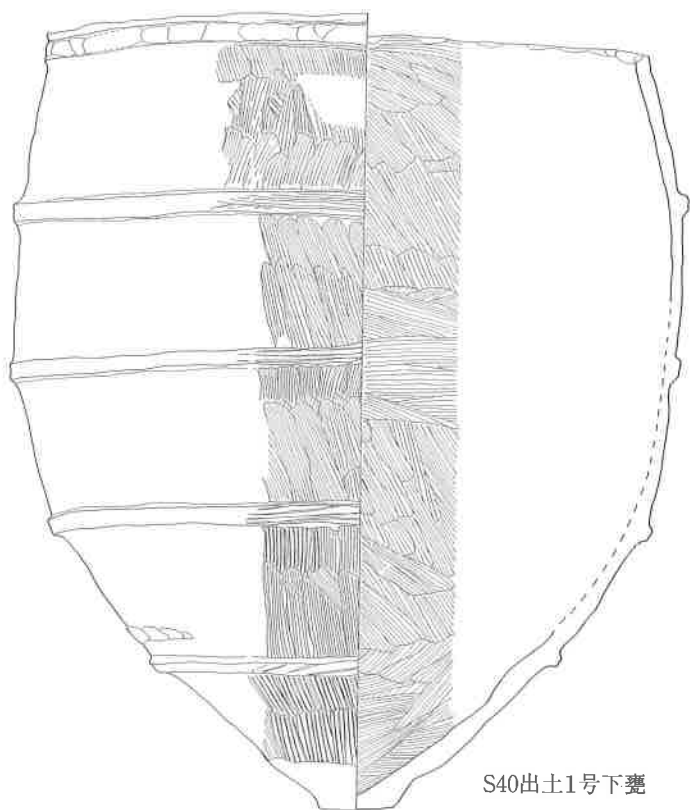
S40出土1号上甕



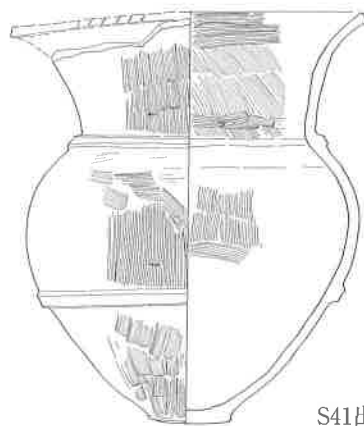
S39出土A棺



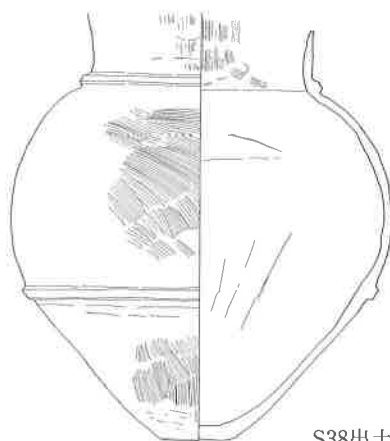
S39出土B棺



S40出土1号下甕



S41出土棺



S38出土棺

0 10 20 30cm

第6図 番所遺跡出土甕棺（糸島高校蔵）実測図（S=1/8）

器形や底部、凸帯の感じからみて明らかに昭和39年出土のB棺よりは後出的な要素が認められ、時期も終末期に近いものであろう。器高43.0cm、口縁部径31.0cm、底部10.0cmを測る。

3. 参考資料

福井地区以外においても二丈町内の2遺跡から後期甕棺が出土しており、現在、郷土資料館に保管されている。大神番号4、6にあたるもので参考として紹介しておく。

長石遺跡

所在地 福岡県糸島郡二丈町大字長石字西原

出土状況の詳細は不明であるが、保管されている甕棺（大神番号6）に長石出土との注記がある。同地区では長石第1号から第4号遺跡までの遺跡が『福岡県分布地図（糸島郡編）』、『二丈町詳細分布地図』によって周知化されているが、共に昭和49年に原田大六氏によって監修、作成された『二丈町文化財地図』がその元となっている。これによると、全ての遺跡は甕棺墓となっており、同甕棺の出土地としては定かではないのが現状であるが、遺跡の概要を記した糸島高校歴史による『いと・しま』創刊号をみると二塚古墳が立地する丘陵の北側端とされ、「石蓋甕棺墓」の出土状況図が掲載されているため、長石2号遺跡がこれにあたるものと言える。

甕棺（第7図）

胴部は卵形を呈し、底部は平底となる。頸部に一条、胴部に4条の扁平凸帯を巡らし、凸帯の多さが目立つ。調整は内外面ともに粗いハケ調整を施す。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。器高94.8cm、口縁部径65.4cm、底部径10.5cmを測る。

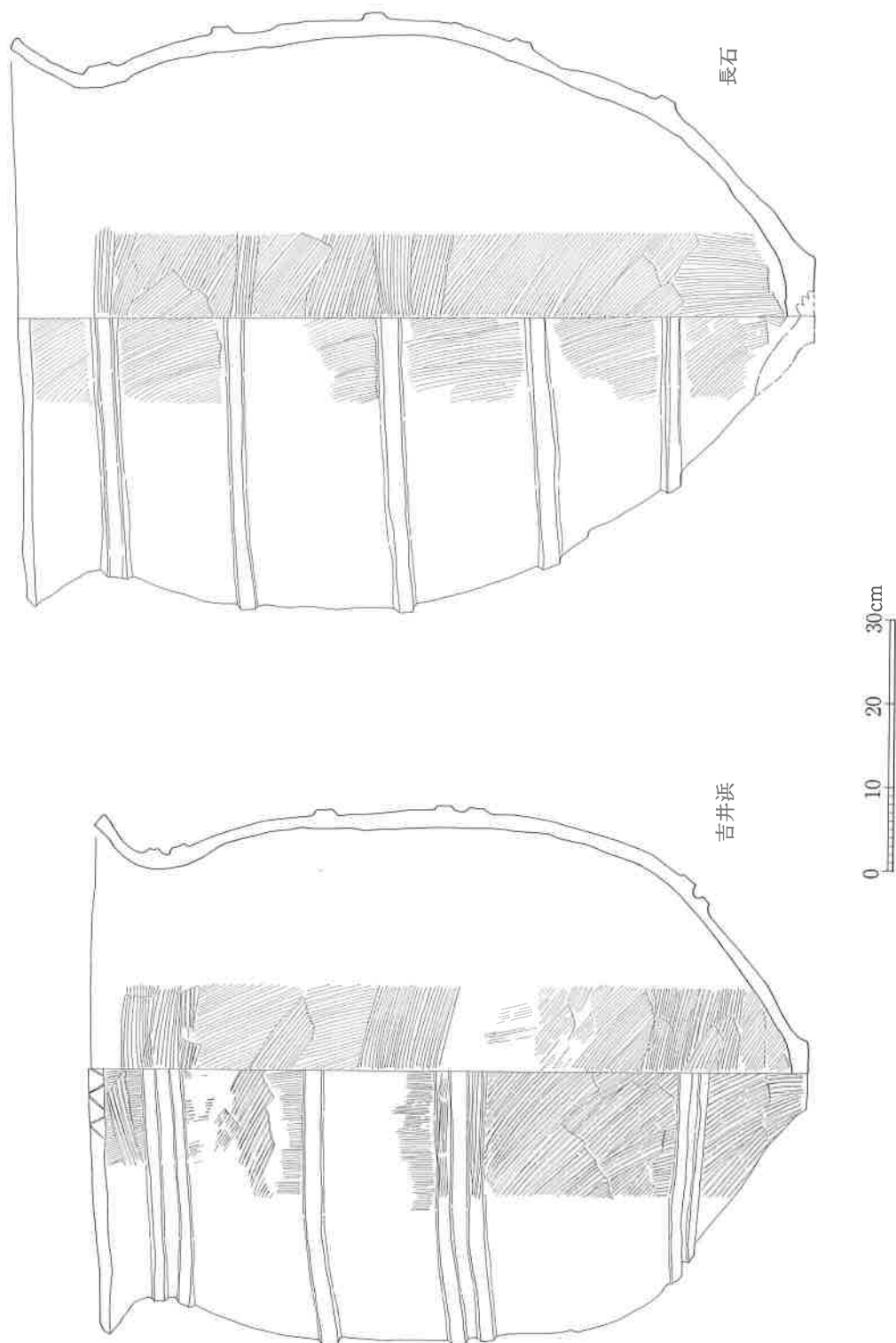
吉井浜遺跡

所在地 福岡県糸島郡二丈町大字吉井字大屋浜

出土状況の詳細は不明であるが、保管されている甕棺（大神番号4）に吉井浜出土との注記がある。前記の『二丈町文化財地図』によると「砂丘上・甕棺墓」と記されている。

甕棺（第7図）

胴部は直線的となり、下部より急激に窄まり、平底の底部へといたる。頸部のしまりは強く、上外方へ開いて口縁部へと続き、口唇部にはヘラ工具による連続の「ハ」字状の刻み目を施入する。凸帯の形状は扁平をなし、頸部に2条、胴上位は1条、胴中位と下位は2条を巡らせている。また、中位の凸帯には板状工具によりナデ調整が施されているほか、凸帯が2本一組となる点に特徴がある。調整は内外面ともに粗いハケ調整が施される。器高84.9cm、口縁部径59.4cm、底部8.1cmを測る。



第7図 吉井浜遺跡・長石遺跡出土塞棺（糸島高校蔵）実測図（S=1/8）



第8図 深町遺跡周辺地形図

Ⅲ．調査の記録

1. 調査の概要（第9図）

申請地は3枚の水田に跨り、区画整理の工事としては高低差を無くし、1枚の区画とするものであった。調査の対象としては当初、3,000㎡となるものと想定していたが、試掘の結果、砂丘頂上部から緩斜面となり、谷部へと続く地形となるため、削平される上段の水田を調査対象として最終的な調査面積としては1,600㎡となった。

調査としては東側上段部分に重機による表土剥ぎを行い、順次作業員を投入しての遺構確認作業から開始した。

2. 検出遺構

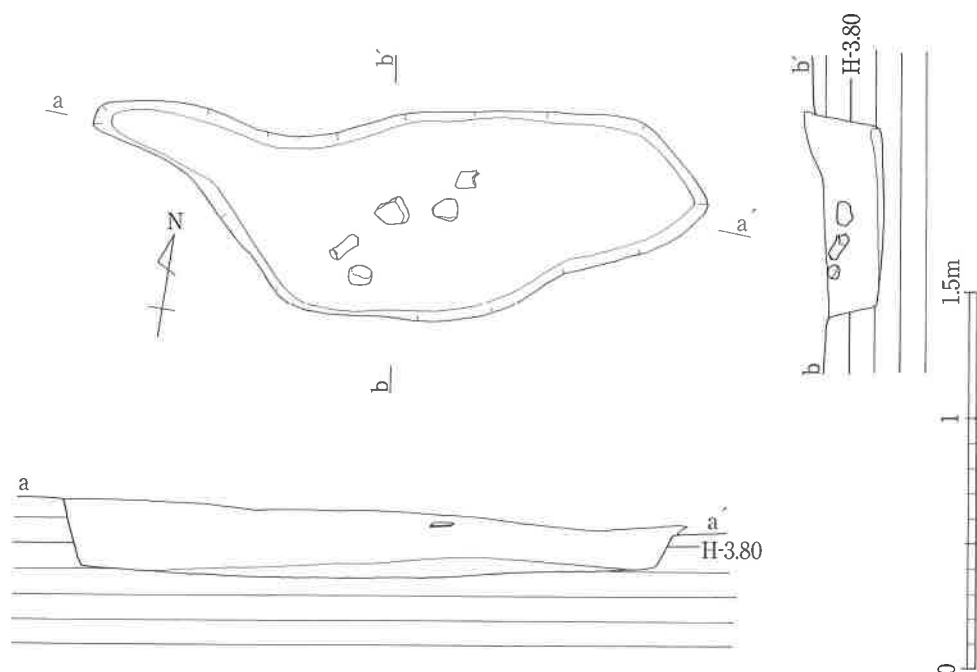
検出された遺構は土壙7基、溝状遺構4本、柱穴状ピット群などであり、遺構面直上には弥生時代後期から古墳時にわたる遺物包含層を確認している。以下、順次説明を加える。

1号土壙（第10図）

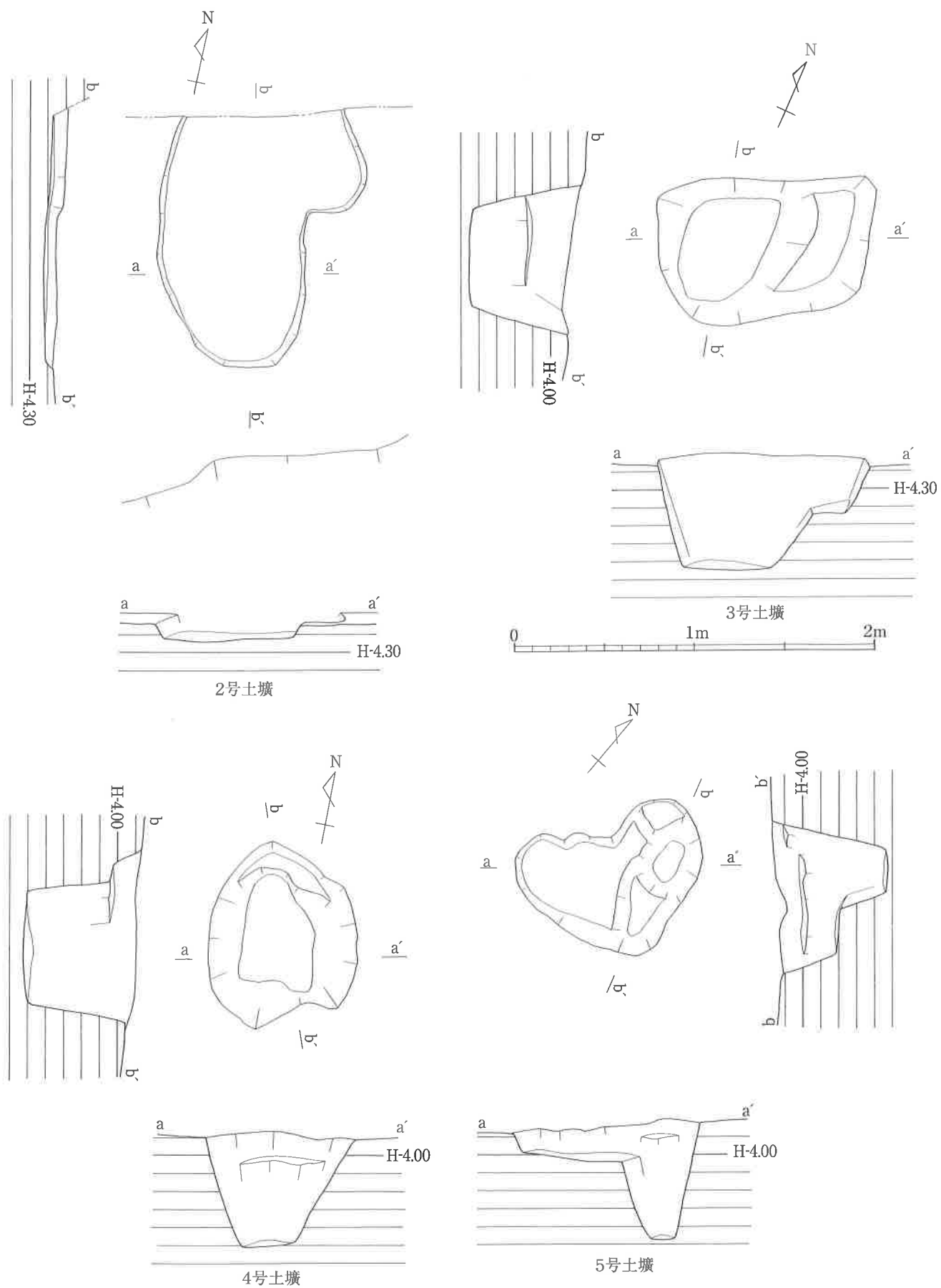
調査区中央部、砂丘上の一段目で検出した長楕円形を呈する土壙である。長軸245cm×短軸81cm、深さ27cmを測り、弥生後期の高杯脚部（混入品か）と須恵器甕片が出土している。

2号土壙（第11図）

調査区西側、砂丘上の一段目で検出した不整形を呈する土壙である。北側が調査区外へと延び、全様は不明である。現状で長軸140cm、短軸80cm、深さ10cmを測り、埋土より弥生後期代の椀形土器の碎片が出土している。



第10図 1号土壙実測図（S=1/30）



第11图 2号~5号土坑实测图 (S=1/30)

3号土壙（第11図）

調査区中央部、1号土壙東側で検出した楕円形を呈する土壙である。東側にテラス面を持つ。118cm×80cm、深さ55cmを測り、埋土より弥生後期代の土器碎片が出土している。

4号土壙（第11図）

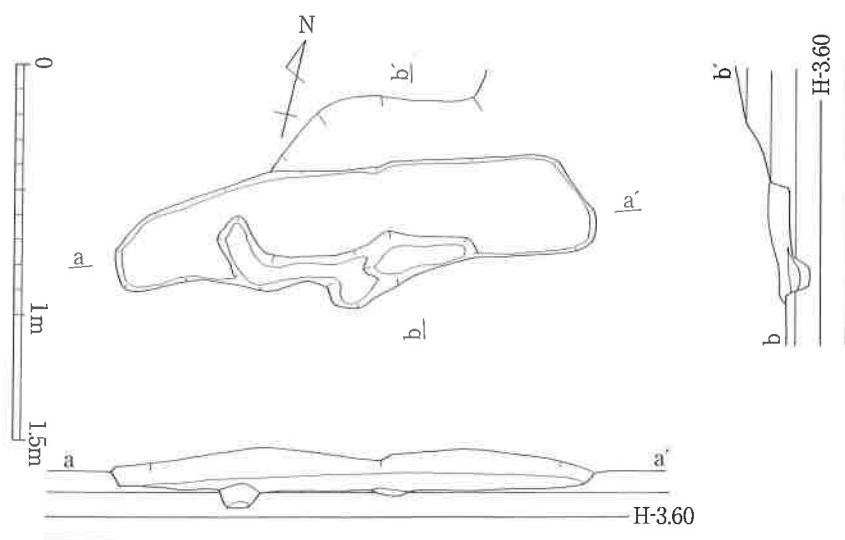
調査区中央部、1号土壙東側で検出した楕円形を呈する土壙である。91cm×81cm、深さ63cmを測る。

5号土壙（第11図）

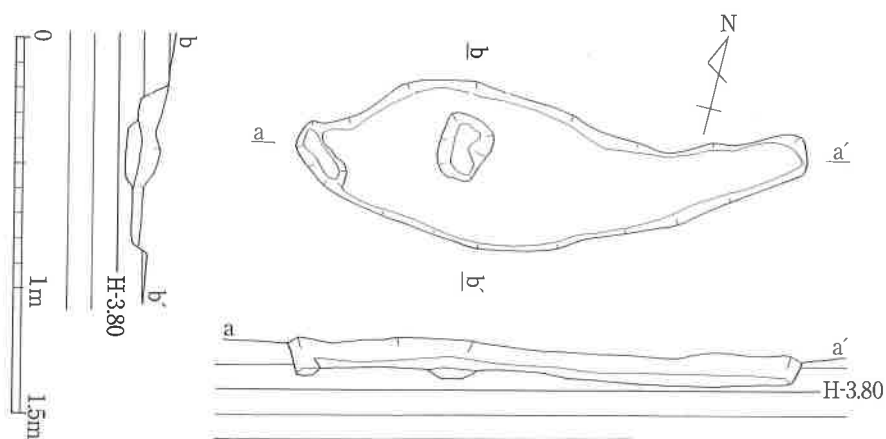
調査区東側で検出した不整形を呈する土壙である。長軸102cm×短軸90cm、深さ63cmを測り、遺物は出土しなかった。

6号土壙（第12図）

調査区東側で検出した隅丸長方形の土壙である。床面南側の壁に沿って20cm幅の溝が付く。長



第12図 6号土壙実測図（S=1/30）



第13図 7号土壙実測図（S=1/30）

軸190cm×短軸54cm、深さ17cmを測り、遺物は出土しなかった。

7号土壙（第13図）

調査区東側で検出した不整形の土壙である。床面西側にピットを設ける。長軸212cm×短軸65cm、深さ13cmを測り、遺物は出土しなかった。

1号溝状遺構（第14図）

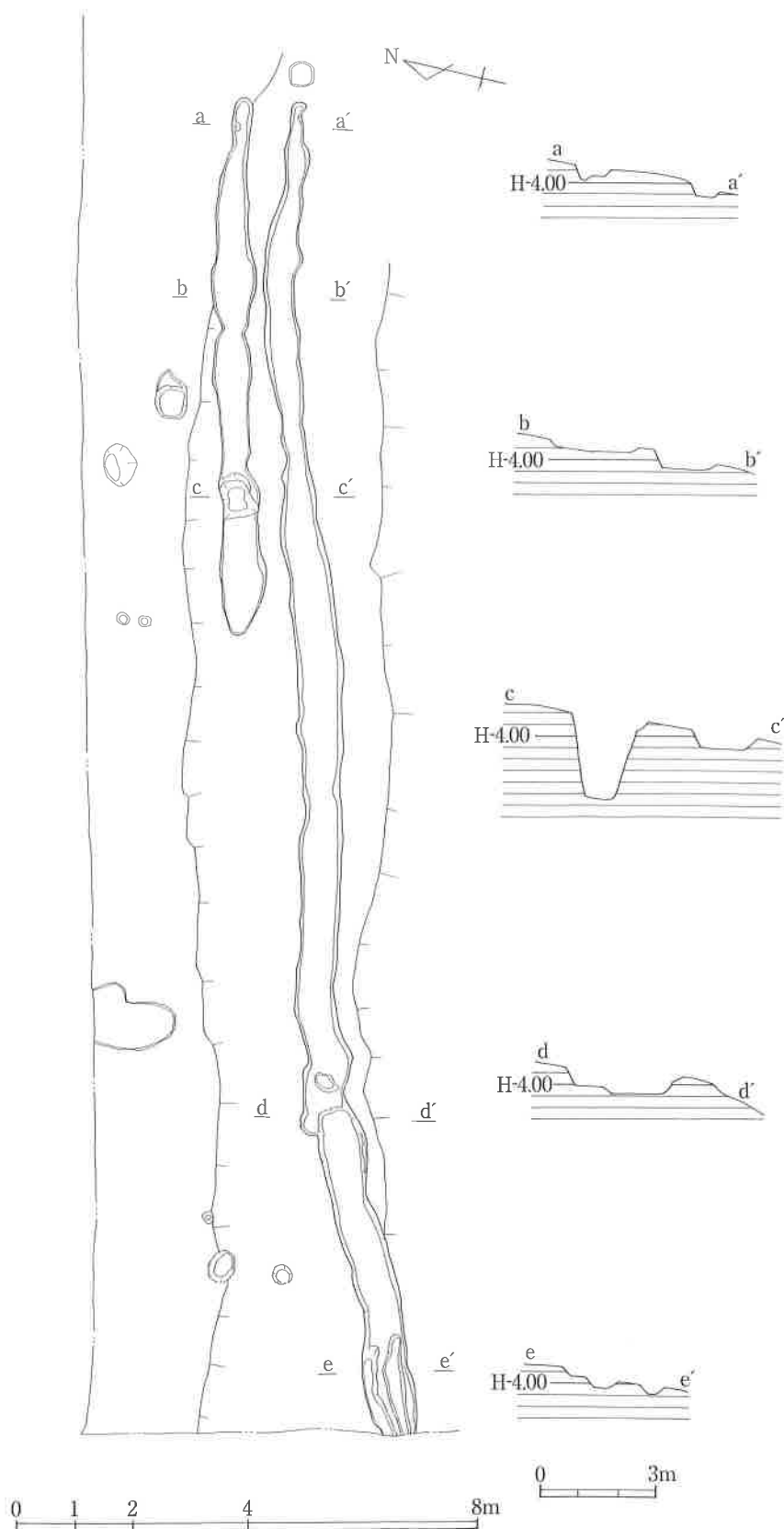
砂丘上、1段目の傾斜変換線に沿って掘り込まれていた溝状遺構である。西側の一部でピット状の掘り込みが確認されている。長さ18m、幅150cmほどで深さ15cmと残り自体は悪い。出土遺物は碎片ばかりであったが、古墳期の土師器片が出土している。

2号溝状遺構（第14図）

砂丘2段目において1号溝状遺構と平行して検出した溝状遺構である。調査区西側より東西方向へと延び、中央部付近で途切れていた。調査区西側隅付近ではテラス状の高まりが確認されている。長さ46m、幅150cmを測り、深さ10cmと残りは悪い。出土遺物としては西側部のピット状の掘り込み付近で須恵器の碎片や叩き石が出土している。

3号溝状遺構（第15図）

砂丘2段目、調査区中央部



第14図 1号・2号溝状遺構実測図（S=1/120）

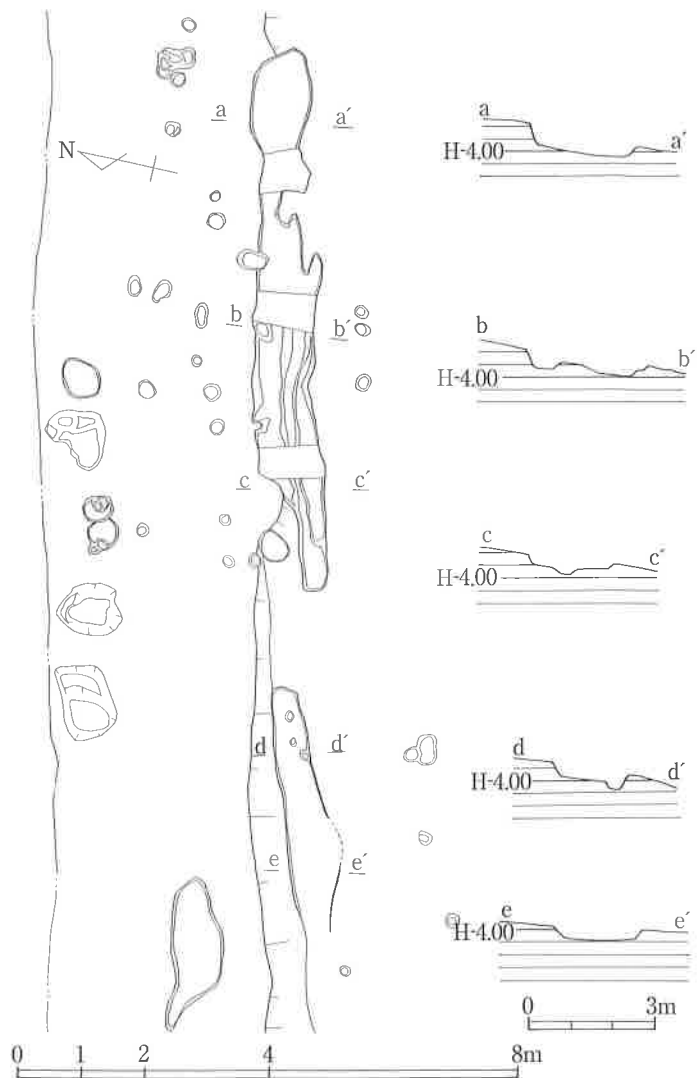
で検出した溝状遺構であるが、2号、4号溝状遺構と接続する可能性もある。長さ11m、幅120cm、深さ5cmと極めて残りが悪く、出土遺物もなかった。

4号溝状遺構（第15図）

砂丘上、1段目の傾斜変換線に沿って掘り込まれていた不整形の溝状遺構である。西側部は二段に掘り込まれ、東側に向けて溝幅が広がりを見せる。長さ17m、幅180cm、深さ20cmを測る。出土遺物としては碎片ばかりで図化にたえなかったが、概ね、弥生後期代から古墳期のものと考えられる。

柱穴状ピット

調査区全域から検出されているが、調査区東側の砂丘二段目に集中している。規則性はなく、判断しづらいが、調査区外北側へと広がると建物跡となる可能性は高い。



第15図 3号・4号溝状遺構実測図（S=1/120）

3. 出土遺物

出土土器（第16図～第19図）

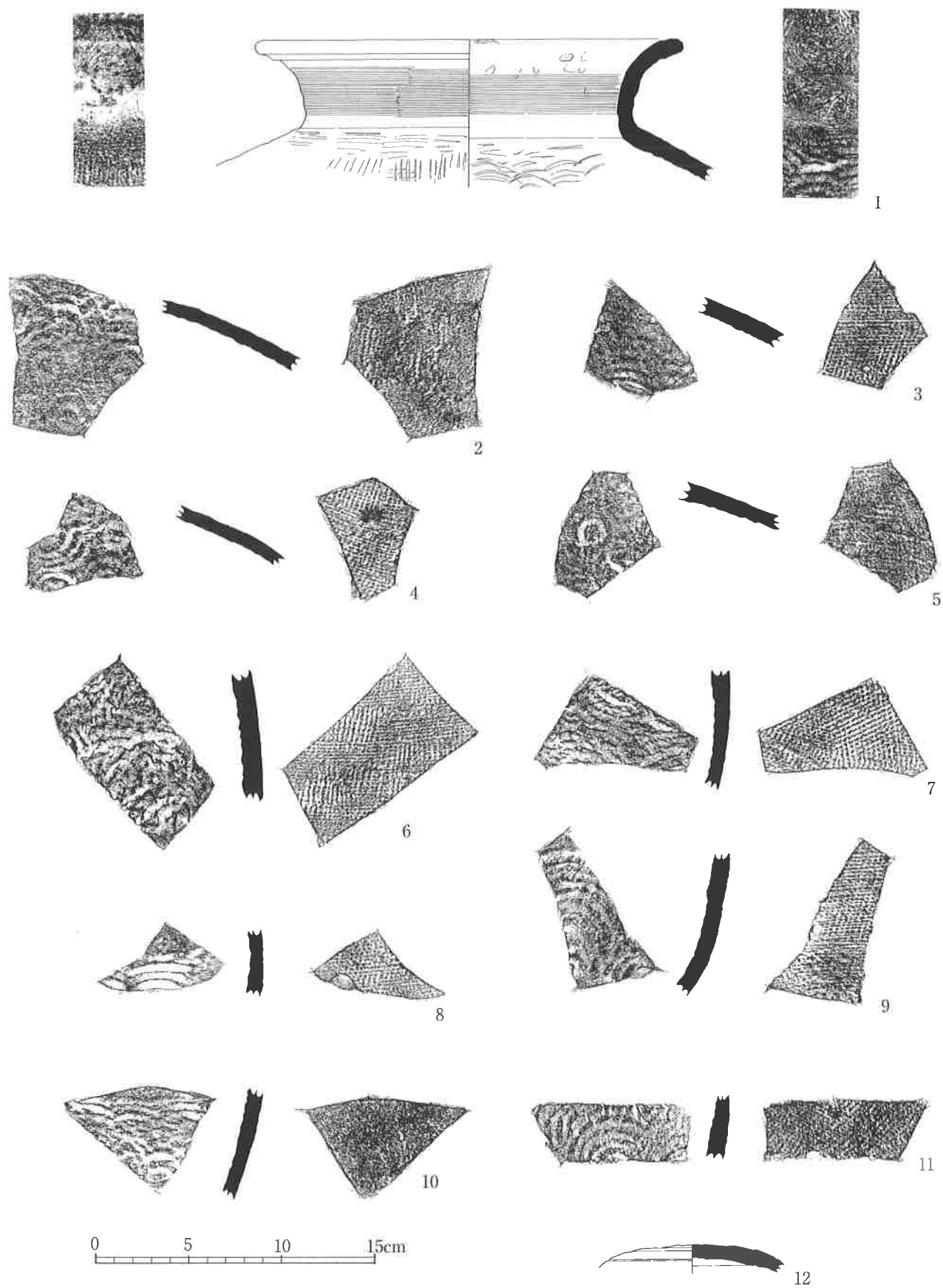
1～15は1号、16は2号土壙出土の土器であり、17～20までは溝状遺構、21～34までは遺構検出面直上の包含層出土の遺物である。

1は須恵器の甕形土器口縁部片である。頸部のしまりは強く、短めの口縁部が付く。口縁部の内外面はカキ目を施し、頸部以下は叩き調整後、カキ目を施す。また、内面には青海波の当て具痕が顕著に残る。色調は暗灰色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良好となる。復元口縁部径23.0cmを測る。

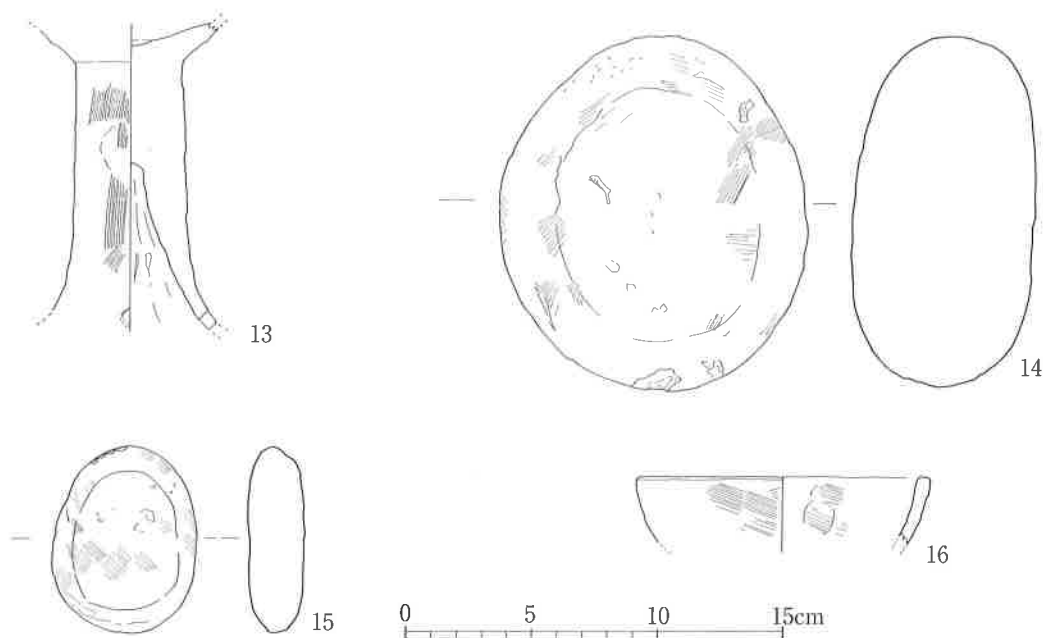
2～11は須恵器の頸部から胴部にかけての碎片であり、接合面はないが、1と同一固体となる可能性が高い。外面はタキ調整後、カキ目を施し、内面は青海波の当て具痕が顕著に残る。

12は須恵器の蓋である。天井部の破片資料となる。色調は淡黄灰色を呈し、胎土に微砂粒を若干含む。焼成は不良となる。

13は高杯の脚柱部片である。脚柱部は棒状となり、裾部への境に穿孔が認められる。外面は細かいハケ調整後ナデ調整。内面にはしぼり痕が顕著に残る。色調は暗黄白色を呈し、胎土には微砂粒



第16図 1号土壙出土遺物実測図 (S=1/3)



第17図 1号・2号土壙出土遺物実測図 (S=1/3)

を含む。焼成は良となる。

14、15は磨き石である。

14は川原石を使用したもので、全面丁寧に磨かれている。長軸14cm×短軸12cm、厚さ7.1cmを測る。

15は長軸7.3cm×短軸5.4cm、厚さ2.1cmを測る小振りなものである。長軸方向の一端に加工面がある。

16は2号土壙より出土した碗形土器の口縁部小片である。丸みをおびた体部から口縁部にいたり、口縁端部が平坦面を持つ。内外面細かいハケ調整を施す。色調は暗黄色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成はやや不良となる。復元により口縁部径11.6cmを測る。

17は1号溝状遺構出土の土師器碗である。破片資料で傾きには確証はないが、全体的に丸みをおびるタイプであろう。器表剥落が著しく調整は不明であるが、内面には板ナデの痕跡が残る。色調は明黄褐色、胎土には微砂粒を僅かに含み、焼成は不良である。

18は2号溝状遺構出土の須恵器の破片資料である。外面はカキ目を施し、叩きの痕跡が残り、内面には青海波の当て具痕が顕著に残る。

19も2号溝状遺構出土の須恵器の破片資料で、内面には青海波の当て具痕が顕著に残る。

20は2号溝状遺構出土の叩き石である。欠損し、1/3程しか残らない。厚さ3.0cmを測り、材質は砂岩製である。

21～34は、遺構検出時に出土したものである。

21は縄文土器であり、口縁部の貼り付けられた文様帯の部分である。文様帯には刺突文を入れる。縄文後期代であろう。

22は壺形土器頸部片であり、肩部に二条の沈線を巡らす。内外面ナデ調整であり、外面には指頭

圧痕が顕著に残る。色調は明褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良となる。弥生時代前期代に比定できる。

23は広口壺の口縁部片である。口縁部はやや垂れ気味となる。内外面、ナデ調整を施す。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良となる。復元口縁部径31.0cmを測る。

24も広口壺の口縁部片であるが、小さな口縁部であり、上端は水平に近い。色調は明黄白色を呈し、胎土には砂粒を若干含む。焼成はやや不良である。

25は大形の甕形土器口縁部である。口唇部にはヘラ工具による連続する刻み目が施入されており、弥生後期後半～終末期にみられるものである。破片資料のため、口径は復元できないが、終末期甕棺に成り得るものである。

26は壺形土器の破片資料である。頸部に一条の三角突帯を巡らす。内外面、板ナデ調整を施す。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良となる。

27は底部片。外面はハケ調整後ナデ調整、内面は丁寧なナデ調整を施す。色調は淡褐色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成はやや不良である。復元底部径7.2cmを測る。

28は破片資料であるが、甕若しくは壺形土器となるものであろうか。胴部は丸みが強く、内外面、粗いハケ調整後ナデ調整を施す。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良好である。

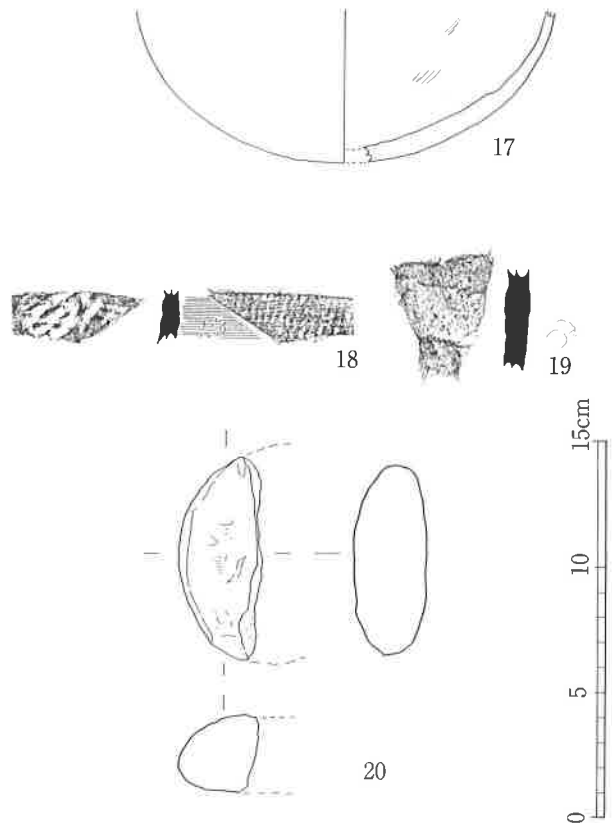
29は高杯の脚柱部。器壁は厚く、外面ハケ調整後、強いナデ調整により成形を施す。脚裾には三方向に孔を穿つ。色調は黄白色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良となる。

30は破片資料であり、器台に復元できる。内外面、粗いハケ調整を施す。色調は明黄褐色を呈し、胎土には微砂粒を含む。焼成は良である。

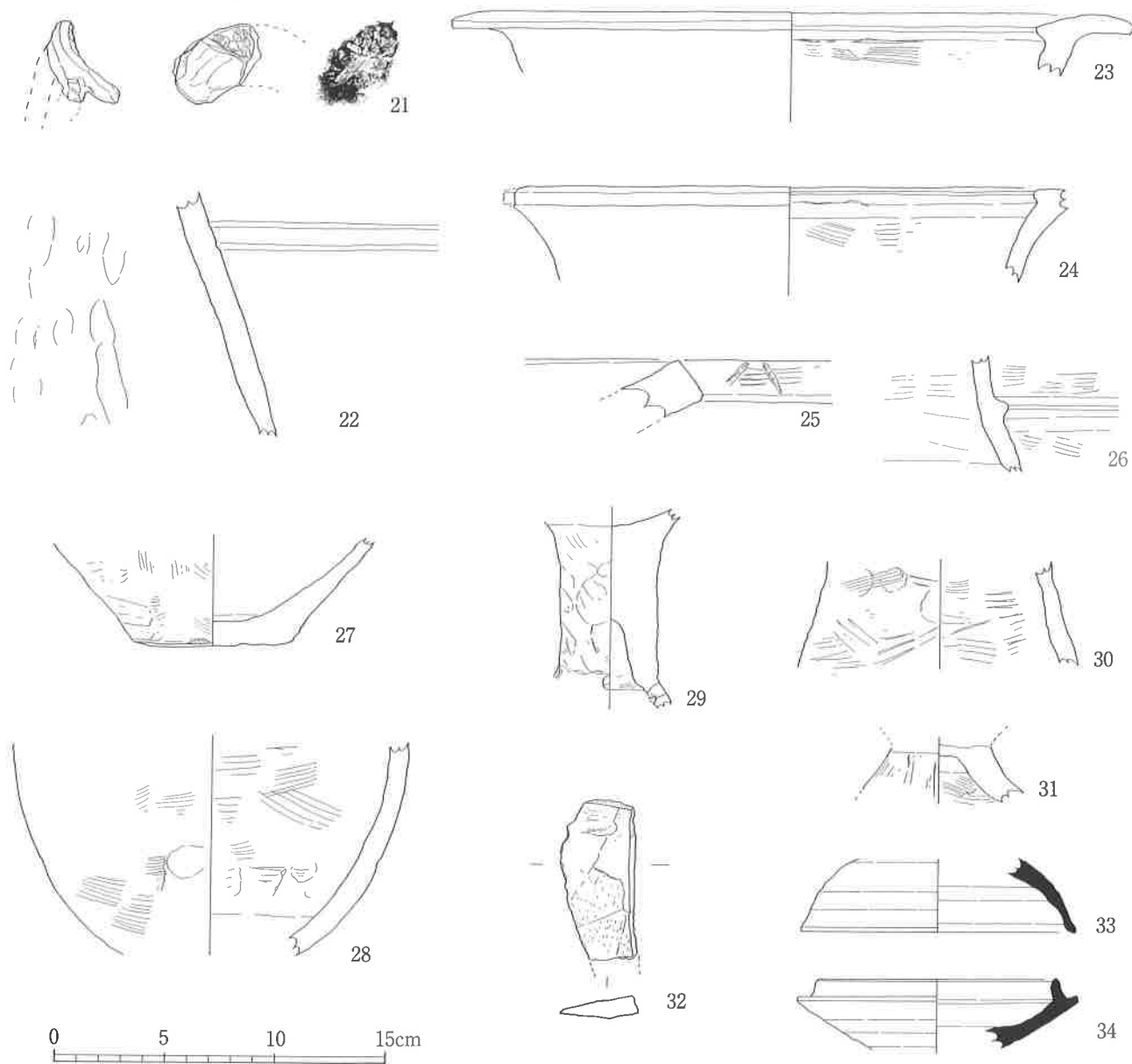
31は脚付き土器の脚部である。外傾度からみて低めの高台となる可能性が高い。鉢形土器が付くものであろうか。内外面、ハケ調整を施す。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には微砂粒を若干含む。焼成は良好である。

32は削器である。片面に刃部をつくる。全長7.1cm、幅3.2cm、厚さ0.8cmを測る。頁岩製。

33は須恵器蓋の破片資料である。口縁端部に平坦面を持つ。外面、回転ヘラケズリ、内面はナデ調整を施す。色調は灰色を呈し、胎土には微砂粒を多く含む。焼成は良となる。復元口縁部径12.4cmを測る。



第18図 1号・2号溝状遺構出土土器実測図（S=1/3）



第19図 遺構検出面出土遺物実測図 (S=1/3)

34は須恵器杯の破片資料である。外面、回転ヘラケズリ、内面はナデ調整を施す。色調は灰白色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良となる。復元口縁部径11.0cmを測る。

IV. 調査のまとめ

深町遺跡の調査では砂丘縁辺部における遺跡の状況とその広がりが確認された意義は大きい。

住居跡や墳墓など明確な集落遺構は確認されなかったものの、出土遺物からみて弥生後期から古墳時代にわたる溝状遺構や柱穴状ピット群が確認された点は、この時期の遺構が砂丘縁辺部の広範囲で広がることが想定され、福井平地における拠点集落と成り得る地域と判断できる。

本遺跡で検出された遺構としては、砂丘緩斜面下に巡らされた溝状遺構が主体となる。集落隅の排水施設的な性格と考えられるが、調査区北側の未調査部分である国道202号線から松原にかけての砂丘上には住居跡などが存在するものであろう。

当遺跡と同様な立地条件の遺跡としては、1 km東方で確認された才良木遺跡が挙げられる。

遺跡は県営ほ場整備事業に伴い平成10年度に発掘調査が行われたもので、平安時代の掘立柱建物や井戸、土壇群などが検出され、長沙窯系陶器をはじめとする輸入陶磁器などが出土している。

才良木遺跡では砂丘南側緩斜面にあたり、斜面下には湿地帯が広がることが確認されているが、集落の隅に溝状遺構が巡らされている点は深町遺跡と同様であり、こうした集落の形態が平安期も同様であったことが考えられる。

深町遺跡での出土遺物としては、遺構検出面より出土した縄文土器（第19図-21）と弥生前期の壺形土器片（第19図-22）が注目される。ともに包含層出土であり、遺構には伴わないものの本書のⅡ. 位置と環境でも紹介した『糸校文林』に縄文土器や弥生前期の土器片の報告例があるため、今後、縄文期から弥生前期にかけての遺構の発見にも期待がもてる。また、今回の調査では弥生期の明確な遺構は検出されなかったが、砂丘上の広い範囲において甕棺墓群が存在することは確実であり、集落、生産地、墳墓などが確認されれば、海浜部における集落形態の解明につながり、今後、資料の蓄積を待って集落モデルの構築を行いたい。

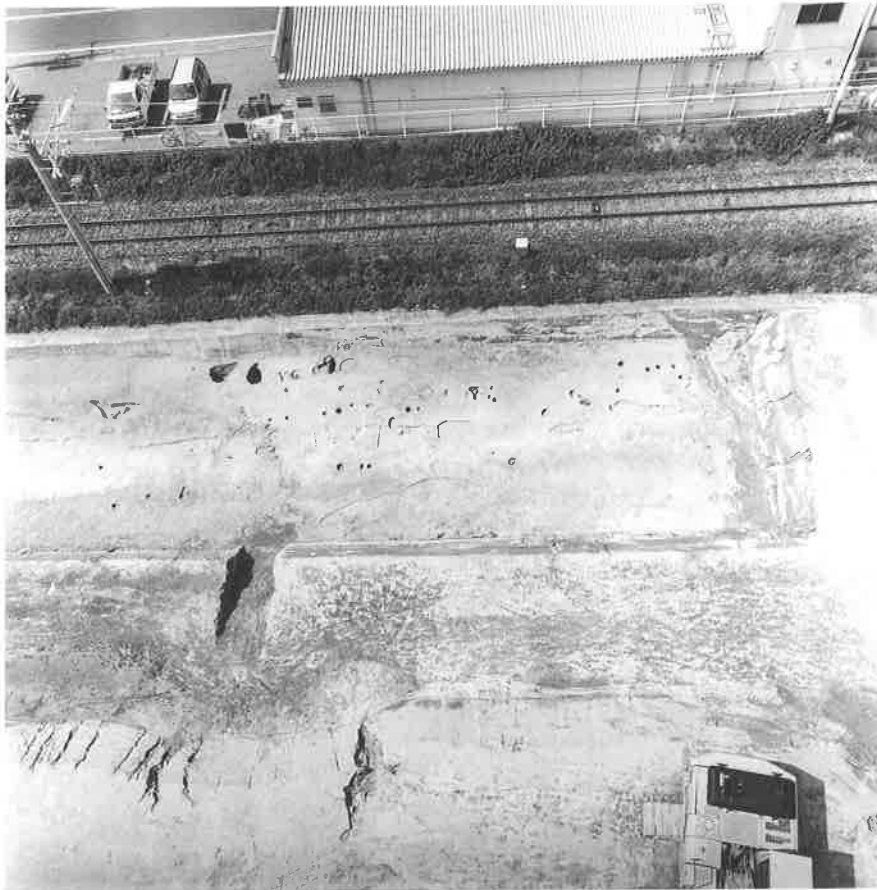
写真図版



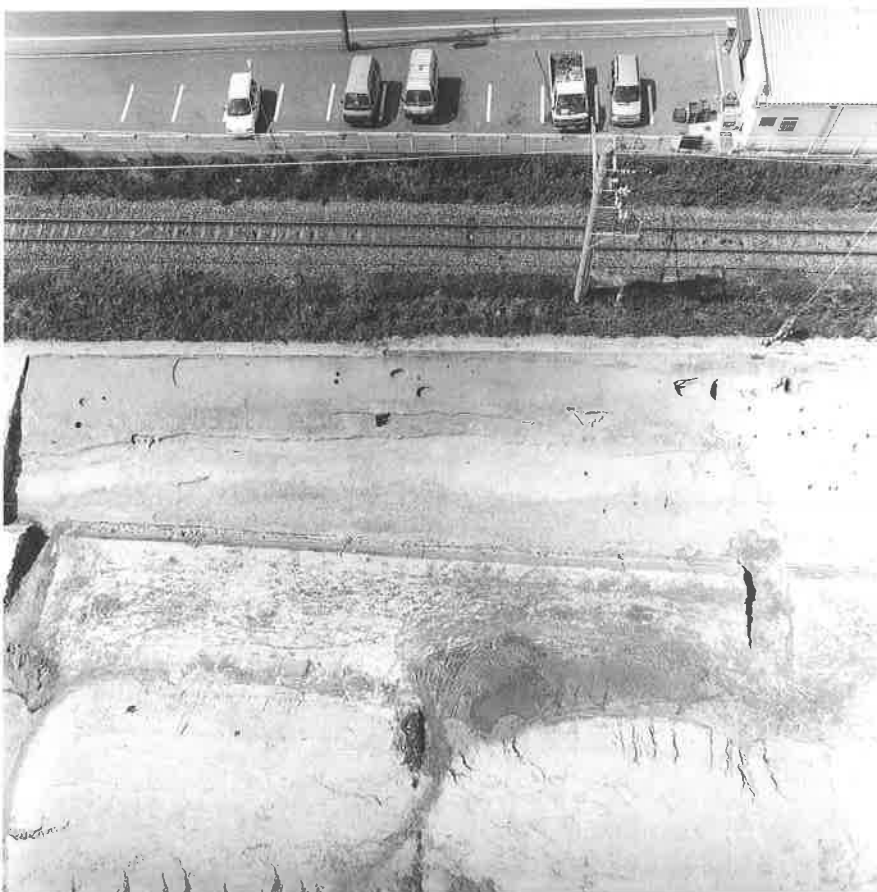
遺跡全景（真上より）



遺跡全景（南側より）



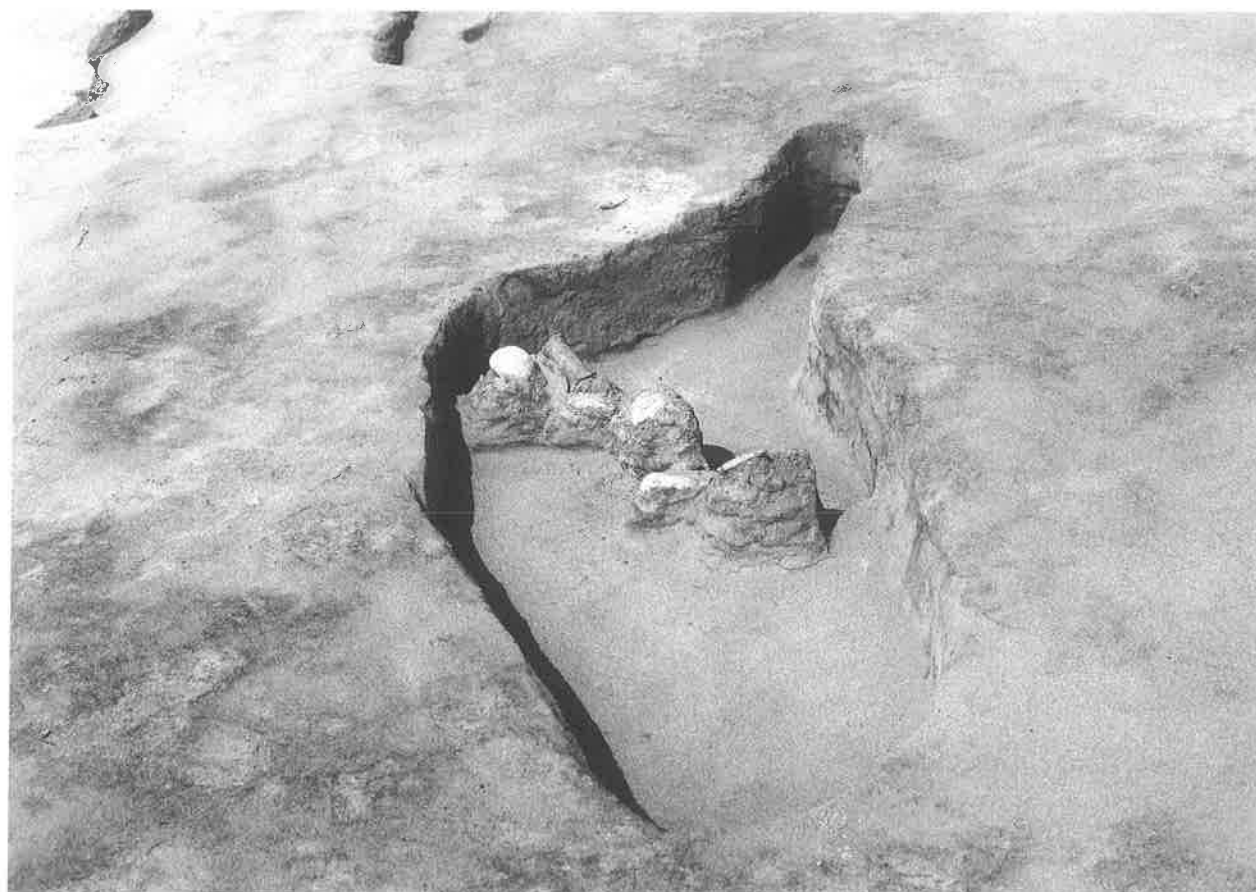
東側遺構検出状況



西側遺構検出状況



1号土坑（北側より）



1号土坑（東側より）



1号・2号溝状遺構全景（真上より）



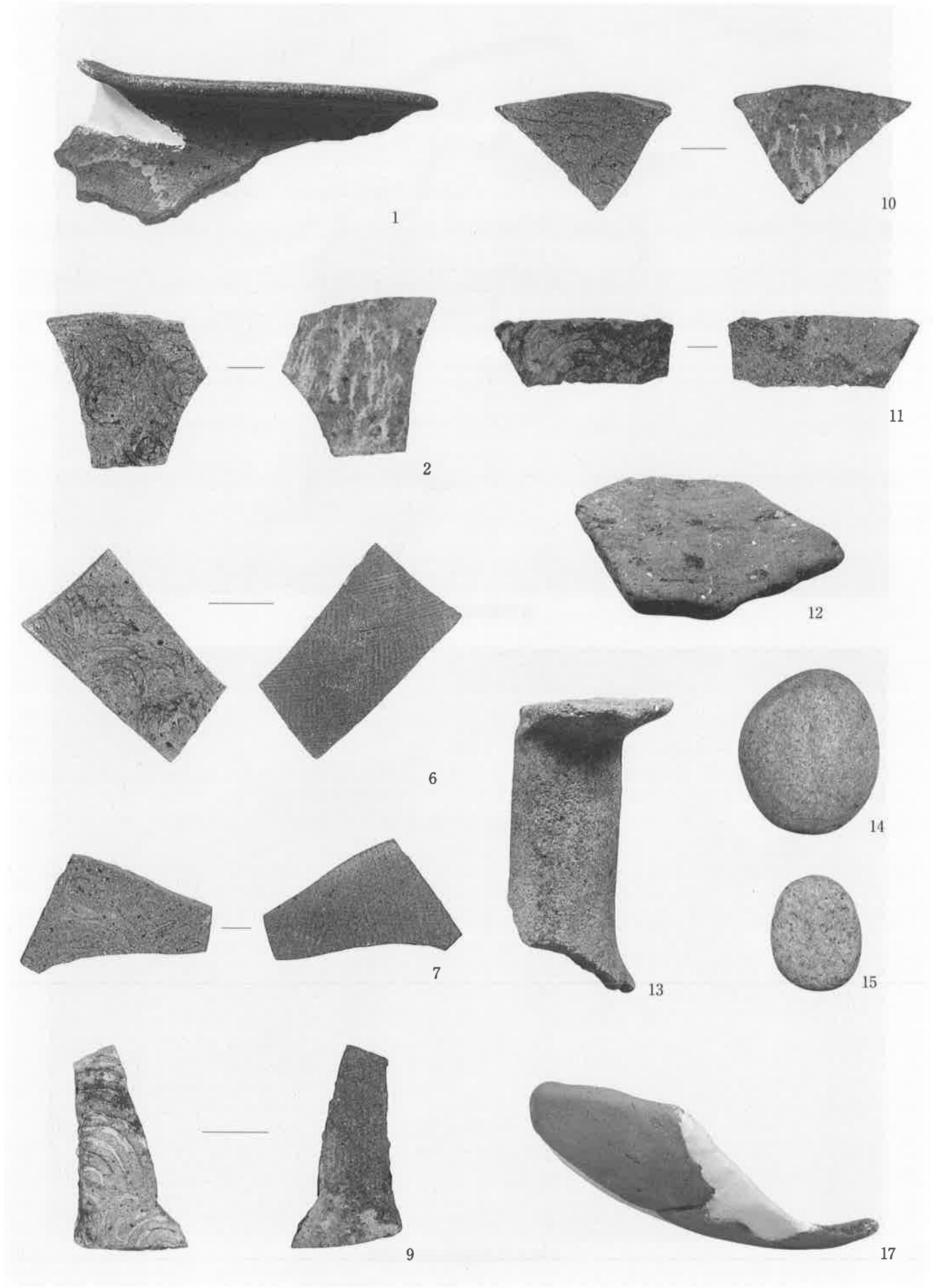
1号・2号溝状遺構全景（西側より）



4号溝状遺構近景



4号溝状遺構遺物出土状況



出土遺物 1



21



27



22



28



23



29



31



32



24



33



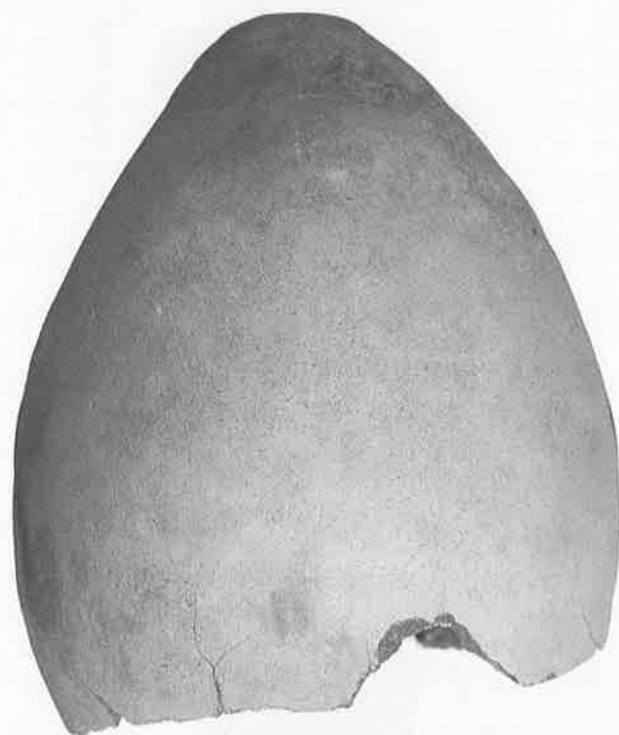
25



26



34



冬切遺跡1号甕棺（左上）

冬切遺跡2号甕棺上甕（右上）

冬切遺跡2号甕棺下甕（左上）

冬切遺跡出土甕棺



番所遺跡 昭和40年出土1号甕棺上甕



番所遺跡 昭和40年出土1号甕棺下甕

番所遺跡出土甕棺 1



番所遺跡 昭和39年出土A号棺（左上）

番所遺跡 昭和39年出土B号棺（左下）

番所遺跡 昭和41年出土甕棺（右上）

番所遺跡 昭和41年出土甕棺（右下）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふかまち い せ き
書 名	深 町 遺 跡
副 書 名	二丈町文化財調査報告書
巻 次	第 39 集
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	古川秀幸
編 集 機 関	二丈町教育委員会
所 在 地	福岡県糸島郡二丈町大字深江 1360
発 行 年 月 日	2008 年 3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
深町遺跡	福岡県 糸島郡 二丈町 大字福井 字深町	4 6		33° 30′ 04″	130° 05′ 37″	970407 ～ 970430	1,600㎡	個人農地 区画整理
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	集 落	弥生時代後期 ～ 古墳時代		土 壙 柱穴状ピット 溝 状 遺 構		須 恵 器 弥生土器		

深 町 遺 跡

福岡県糸島郡二丈町大字福井所在遺跡の調査報告

二丈町文化財調査報告書

第 39 集

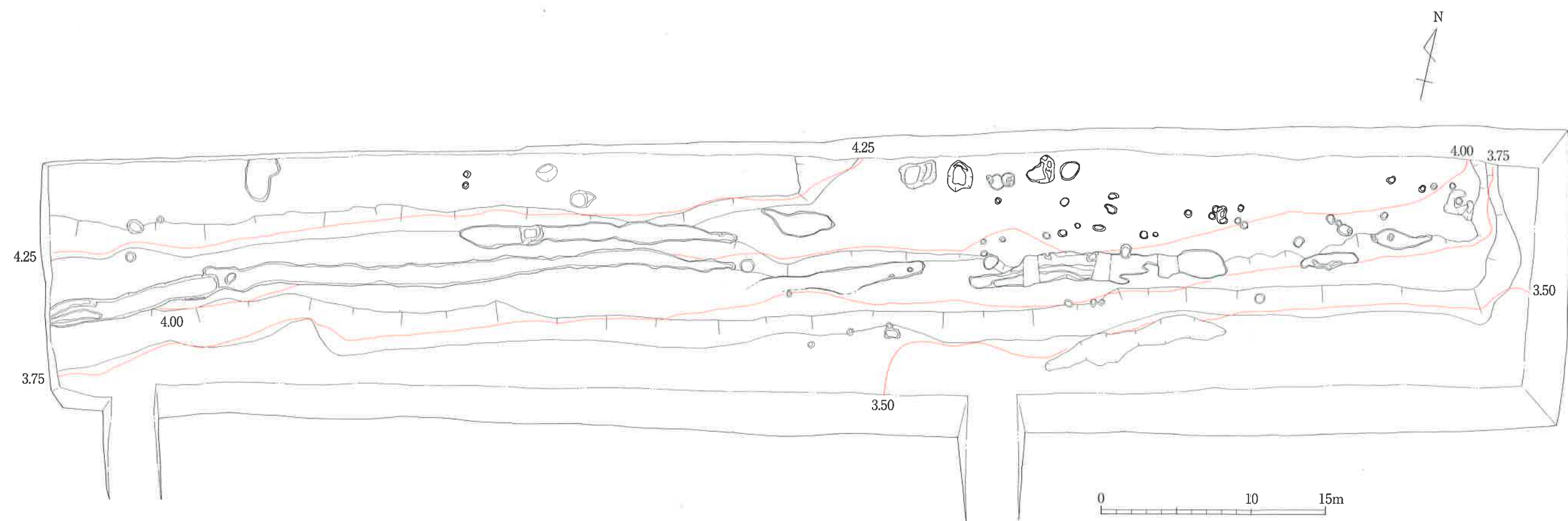
平成 20 年 3 月 31 日

発行 二丈町教育委員会

福岡県糸島郡二丈町大字深江 1360 番地

印刷 大同印刷株式会社

佐賀県佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20



第9図 遺構配置図 (S=1/300)